総括報告

宗教・永遠・エロス

——「生命と現代文明」の先にあるもの——

鎌田東二
（聞き手：森岡正博）

—— まず、「生命と現代文明」の総括ということですが。

生命と宗教について考えていることを話します。共同研究「生命と現代文明」の議論で、宗教との関連で欠けていたのは、「永遠」という視点だと思います。永遠と宗教は、非常に密接に結び付いています。生命は、非—永遠の中に閉じられているがゆえに、コミニュケーションをもち得るし、多様性をもち得る。そして閉鎖系であるにもかかわらず、開放系でもあるという構造をもっていると思うんですね。

つまり、生成変化の中に生命、あるいは存在がある。ところが、「永遠」はそういう意味での一回起的な生成変化をもたない。ですから、生命が「永遠」にあこがれるという構造は、宗教にとって非常に本質的であったと思うんですね。

「永遠の生命」に対する渇望は全宗教史を貫いています。

有名な旧約神話のエデンの園の話を考えてみましょう。ご存じのように、アダムとイヴは神に禁止されていたエデンの園の中央に立っている木の実を食べて追放されてしまうのですが、彼らが食べた木の実は「善悪を知る木」、つまり知恵の木の実ですね。これを食べることによって、人間は善悪を知る、特に悪を認識するという神のような知恵をもった。実はもう一つ、アダムとイヴには禁断の木の実があったのです。それは「生命の木」の実でした。もしアダムとイヴがそれを食べると「永遠の生命」を得てしまう。それでは神と同じになってしまうと神は恐れて、それで彼らをエデンの園から追放したのです。これを読むと、知恵あるいは叡智と「永遠」の生命、この二つが神の属性であったことがわかります。また古代のケルトの信仰にも「常若の国（テイル・ナ・ノグ）」の信仰があったし、日本にも「常世の国」の信仰があって、「永遠」に対する渇望がいかに深いものか知らされます。

また、霊魂不滅や輪廻転生の思想も、ちょっと違うレベルですけれども、永遠性に絡む直観であり思想です。古代エジプトの場合だと、太陽の運行は日没して一回死んで、夜の川を巡ってもう一度蘇って再生してくる。循環的に生死を繰り返すわけですけれども、それが永遠に繰り返すと考えられた。それと同じように、人間の生き死についても、始まりと終わりというものはあるけれども、それが永遠に繰り返されて輪廻転生となる。

近代の哲学的な言説の中では、永劫回帰というニーチェの言葉に収斂されていくような存在認識が、そこにはあった。そういう、「永遠」に対する渇望が、生命、特に人間生命になぜ発生して来たのか。これが、宗教と生命を考えていくうえで重要なポイントになると思います。それが霊魂観念や、自然を動かしている大いなる永遠の力との関連の中で、重要になってくると思いますね。

―― 現代の場合はむしろ、この世で「永遠」を追求したいという渇望があるのでは。

「永遠」という感覚をむしろ忘れているんじゃないかと思うんですよ。むかしは、波多野清一の『時と永遠』にみられるように、「永遠」というものが宗教学上の、あるいは宗教哲学上のテーマになった時代があったでしょう。ドイツ観念論の時代においても「永遠」が、哲学上のテーマになりました。ランボーは、『地獄の季節』の中で、「見つかった / 何が ?/ 永遠 / 太陽と手を取り合って行った海」（粟津則雄訳）という詩を書いています。この詩の題は、ズバリ、「永遠」ですね。しかし、最近では、「永遠」というものについて真剣に考えていこうとする態度や衝動は、哲学的にも科学的にもほとんどなくなってきたんじゃないか。「永遠」に対する感覚が非常に希薄化したように思います。

―― その理由は、何だと思いますか。

ごく簡単にニーチェ的な言い方をすると、背後を見る力をなくしたということです。ニーチェは背後を見る力を失うこと自体を肯定的にとらえてるわけですけれども、背後を見る感覚と思想が失われた。

―― 背後っていうのは、後ろ、隠れた所ですよね。

そうです。つまり、霊界とか霊的なものです。そういう目に見えない霊的世界や霊的存在が救済のストーリーを作っていました。キリスト教は、イエス・キリストを信じることによって弱く悩める罪ある者の魂を永遠に救済していくと説いた。背後を見るそのような思想は、人間の生命を弱めていく力なんだとニーチェは主張したわけです。ニーチェのそのような批判は、ある意味であたっているんですけどね。

しかしながら、やはり、「永遠」感覚の希薄化は、背後をみる力、あるいは他界をみる想像力の喪失と関係していると思います。それは、さらに言うと、霊魂に対する感覚であったり、自分の存在の根源がどこから来ているのかという直覚、直観の喪失ではないでしょうか。

―― では、第1に、どうしてそのような直覚が減退してきたのか。そして第2に、現代でも、セラピーだとか新々宗教の流行などに見られるように、「永遠」に対する渇望はまだ生きているわけですよね。この点をどう解釈すればいいのか。

「永遠」を感得する力が失われたことは、理性あるいは知性の発達と大いに関係があるし、近代科学技術の発達とも結び付いています。地図で言えば、メルカトル図法のように、どちらの方向にむかっても均質的な空間が広がっているという認識図式が、近代的理性を支える基本的なシェーマになってきました。ニュートン的な時空間、すなわち絶対時間と絶対空間、あるいはその後でてきたアインシュタインの相対性理論や、科学的な宇宙論によって世界がとらえられるという考え方が中心を占めて来たことが、一つの原因です。自然科学的宇宙論の成立ですね。以来、「永遠」について思考することを停止したと思うんですよ。

例えば、宇宙はビックバンから始まるというビッグバンセオリー。ビッグバン（大爆発）後、超高密度な原初の空間において、最初の数秒間で、元素ができて、宇宙は永遠に膨張し続けていく。だとすれば、それ以前はなんだったのかということについて、答えを求めることはできない。天体の観測から一番初めの起源を推測するしかない。神話は常に始まりを語って来たし、宇宙の始まりや世界の始まりを神話的な構想力で語って来ました。しかし、ビックバンセオリーや科学的な宇宙論がでてくることによって、ある永遠的なものに対するビジョンやイメージを、それ以上追求し確認するような事は判断停止したのです。

―― 第2点については、どうですか。「永遠」に対する渇望はいまでも存在しているのではないかという点ですが。

それは、おっしゃる通りあると思います。癒しや、気功や、新宗教などでいま語られている重要なテーマは、存在の連続性についての気づきや覚醒です。つまり、人間が「永遠」というものに近づこうとしたときに、非連続なものをどうやって連続のフェイズにもっていくかというテーマです。いのちというのは個体的に、個別的にある。その個別的に切り離されているひとつひとつの個体の、連続的な繋がり、生命と生命あるいは生命と他の存在者との間のつながりを、もっと深く広く見つめていこうとする。連続性を見ることによって永遠の生命の流れにつながっていく。それを認識したり、イメージすることによって、「切り離された個体的存在」という理解が非常に一面的であったということをもういっぺん見直してみる。1960年代以降の、ニューサイエンス、ニューエイジ思想、あるいはエコロジーやディープエコロジー思想では、そういう見方が強くなっていることは確かです。

―― 永遠を求めるというのですが、いまおっしゃったように、個々のいのちは有限であるというとりあえずの前提があるわけですよね。生命に有限性を与えているのは、個体の死だと思うんですね。ですから、死というものを、我々が永遠に至れない証しとしてみるのか、あるいは死というものを永遠にいたる契機として見るのかというあたりが、宗教的に見ると大きな分かれ目だという気もするのですが、それについてはどう思われますか。

死を「永遠」への否定的な契機とするのは、宗教の基本的な戦略です。死は完全に個体の断滅です。その生涯のあらゆる形態や記憶や関係性が、死によって途切れてしまうのですから。

そういう意味では有限性と同時に個体の断滅を、あるいはこの世における個体の欠如を体験するわけです。

ところが、この世における個体の断滅が、実は、目に見えない霊界や他界と、もっと大きい強い結び付きをもっているんだという直観や想像力があって、それが宗教のもつ基本的な世界図式ではないかと思うのです。

―― 個体の死が「永遠」に結びつくには、ふたつの道があると思います。ひとつは、この世での死が、他界での永遠の生に結びつくと考えるやりかた。もうひとつは、食物連鎖や子孫への連鎖によって、この地球上でいのちの永遠性が獲得できるという考え方。このふたつは、一見すると別のことを言っているように見えるわけですよ。前者のほうは、この空間とは違った所に永遠の世界を求める考え方であり、後者は、時間的にも空間的にもこの空間を拡大することによって、この世界で永遠につながろうとする考え方。その辺りの違いについてはどう思われますか。

後者のエコロジカルな考え方は、つながりの関係性を、空間的にどこまでも延長させていくという考え方ですね。

―― そうです。

しかし、極端にいえば、地球のなかで連続性や関係性の拡張をはかっていったものが、地球外生命や地球外の存在との関係性、さらには銀河系や宇宙そのものへと最大に拡張していくとすれば、私はやはり論理的な必然として、それは他界に至らざる得ないと思うんですよ。自分たちの存在が、今あるこの時空上の関係性とは違う関係性までをも含んでしまうということ。つまり、時空を時空たらしめている時空に至って、宇宙は閉じられていないということにもなるわけです。

―― 要するに、この時空の関係性の網を徹底的に拡張してゆくと、それは他界までをも必然的に含み込んでしまうということですか。

そうです。この世界と他界がワープし、つながってしまうというふうに、私は論理的に思います。

―― それは非常に、おもしろい考え方ですね。

どちらの考え方も、ある限定した領域の中でものを考えているわけです。前者の他界があるという考え方も、天国であるとか高天原とか、ごく簡単にいうと、自分たちの生命圏、つまり地球中心主義の世界の中にある他界の構想ですね。エコロジカルな発想の中にあるのも、地球生命圏構想だと思うんですよ。どちらも、ある前提をもっている。その前提を外して、論理的

に徹底していくとするならば、両者は別物を語っているわけじゃなくて、同じ全体構造を語っているのではないかと思います。

―― 今のお話を聞いていると、例えば、古代インドの輪廻の考え方によく似てませんか。つまり、この世界での空間的なすべての関係性そのものが、別次元の世界の関係性へと、繋がっていくわけですよね。

輪廻転生思想と、食物連鎖は、結び付いています。

ここで今、もうひとつ考えておきたいことは、セックスと永遠性ということです。永遠性を感じられる瞬間というのは、それぞれが個体的で切り離されているけれども、切り離されているが故にもっとも強い連続性を感じられる瞬間にある。それは物理的な意味での永遠ではないですけれども、人間が想像したり感得したりする永遠性というのは、そういう瞬間に立ち起こっていると思うんですね。

そのひとつが、食べるという行為です。食べることによって、個体的な非連続性が連続性を獲得する。食べることは、他者や世界とつながることなのです。

性も食もコミニュケーションにかかわっています。つまり、非連続なものを連続の状態にするのは、コミニュケーションです。そのコミニュケーションのひとつとして、儀礼的なコミニュケーションがある。神や死者の霊に供え物をして、それを一緒に食べる。食べるという儀礼的行為を行ない、神話的物語を語ることによって、永遠性を感得する瞬間をもつ。

もうひとつ重要なのが性です。プラトンは、「恋について」という副題をもつ、『饗宴』という対話編の中で、人間はもともと男男、男女、女女という3つの種族であったと語っている。ところが、その人間があまりにも強力で傲慢になり過ぎたので、神は怒って、手足それぞれ4本、顔が2つ、胴体1つの人間を、真っ二つに切り離してしまった。それゆえ、人間はその自分の半身を渇望し求め続けることになった。そして、始源的な完全性を回復しようとして、合一へのあこがれをもつのだと言う。性的に結び付いたときに、もっと通俗に言えば性的な一体感、エクスタシー状態の中でひとつになる。元の完全性の中に収まっていゆくことを味わう。

これが、性と永遠という問題にかんするひとつのイメージであり、解答です。実際には、人間の性的行為というのは、時間的な経緯がありますから、永遠に続くわけではない。射精を永遠に引き伸ばすことはできないし、オルガスムスを永遠に引き伸ばそうとすることは、物理的時間としては不可能です。しかし、そこには自分たちの個体的な限界を越えたと思われる瞬間が、やはりある。個体的な限界を越えた時に、何に包まれるのか、どういう位相に達するかということが、セックスの領域では非常に重要です。一種の他界へと連れ出されていくような、さっきの話との関連で言えば、未知なる世界、他界の領域へと存在が運ばれていくような、そういう感覚をもち得るものが、セックスだと思うんです。

―― 現代の性のディスコース（言説）は、週刊誌的なディスコースと、もうひとつは、アメリカでキンゼイリポートとかハイトリポートなどが出て来た影響、つまり性科学のディスコースが混ざっ

ていると思うのですが、どちらも、例えば「快感」であるとか、「興奮」だとか「オーガズム」だとか、あるいはパートナーとの「愛情」などといったタームで、セックスというものを語るわけです。鎌田さんがおっしゃったような、セックスの中に他界があるというような言い方は、現代ではかなり少数派であって、抑圧されているという気がしませんか。

そうかも知れませんが、それはいい意味でも悪い意味でもロマン主義的な思想の中にはあります。ノヴァーリスというドイツロマン主義の旗手は、哲学的、詩的にそのことをはっきりさせました。古く錬金術の中には、結婚の秘儀は、プラトン的な意味での魂の合一であるという考え方があります。そこで、自然界と霊的なものを結婚させるということが、魔術的観念論としてのノヴァーリス哲学の最も本質的なテーマとなる。そういうドイツロマン主義や、ウィリアム・ブレイクの「地獄と天国の結婚」とか、あるいは錬金術でいう「太陽と月の結婚」だとか、そのような非常に象徴的な原型的結合や両性具有というヴィジョンで表現されてきたものは、いま言ったような他界への誘いや、あこがれを、常に含んでいたと思います。ただ、同時に、その原型理論が権力的な言説構造をもっているという批判をするならば、そこは考える余地がありますね。

日本で、それを典型的に出したのが北村透谷です。北村透谷は、人生の秘奥は恋愛にありというロマン主義的なテーゼを、日本で初めて徹底的に追求し表現した。その恋愛の秘奥とはいったい何かというと、自分の「内部生命」が相手の「内部生命」に触れることです。「内部生命」が「内部生命」とコミュニケーションを果たす。その「内部生命」というのは何かというと、人間の感覚の中で、霊感として、インスピレーションとして感じられるようなものだと北村透谷は言う。つまりそれは、古い言い方をすると「霊魂」なわけです。北村透谷は霊魂という古めかしい言葉ではなくて、もうちょっと近代的な知性に訴えかけることのできる言葉で語りだそうとした。その時に、「内部生命」という言葉を通して恋愛を語り、魂の感覚を語った。そういう「内部生命」論は、大本教の出口王仁三郎などに、影響をあたえている。大本教の出口王仁三郎は、「霊学」とは「内部生命」の探究であると言っています。

―― 現代の通俗文化を見ると、みんながセックスや恋愛のことばかりしゃべっているわけです。でも、それらが永遠への道であるなんて誰も言わなくなってきた。これはどうしてでしょう。

永遠の対極にあるものは、刹那ですね。この永遠と刹那の構造というのは、すごくダイナミックな構造であると今まで考えられてきたんですね。神話的な時間ということで、エリアーデがよく言うのは、神話とかお祭りというのは始源的な祖型の反復であると言う。つまり、祖型を反復することによって、そこに、日常的時間ではない、永遠的な時間、無時間的な時間が現出するんだと言う。そこに聖なるものの次元があると認識したと思うんですね。ある非常に短い時間、神と交信するとか魂と交信するとか、言ってみれば刹那的な時間の中に、人間が感得できる「永遠」への通路がある。そのようにしてしか、人間は永遠性を感得できないという、永遠と刹那の構造がある。そのダイナミックな関係を、祭りなら祭りという方法論を通して結

び付けようとする戦略があったわけです。問題は、そういう、永遠と刹那が切り離されてしまった状況があるということではないかと思うんですね。

つまり、神話的な時空や祭儀的な空間に対する信頼も感度もずいぶん少なくなってしまった。永遠と刹那というダイナミックな関係を生きられる空間ではなくて、そのかわりに、刹那そのものがその都度その都度果てしなく求められていくというような反復性の中に、現代文明の性的渇望というものは置かれているのではないかと思います。

―― 恋愛やセックスにいろんな人の関心が向いていますよね。これは、うがった見方をすれば、「永遠」を感じたい我々の無意識が、我々をそちらの方へと駆り立てているのではないか。そう考えると、現代の産業やメディアが、セックスや恋愛の装置をいっぱい作ろうとしているのは、かつてあった祝祭空間というものを、今ある消費社会のなかで、作り出そうとしているんだというふうに見ることもできませんか。

それは、この前森岡さんと対談した『電脳福祉論』（学苑社）の中で語られていた問題、つまり、シャーマニズムが現代の電脳空間の中で別の形で蘇ってくるという考えと一致するし、『意識通信』（森岡正博、筑摩書房）の中で語られてきていることともつながってくることですね。その観点そのものは、僕は有効だと思いますけれども、しかし、前にも何度か話したような疑問があるわけですね。つまり、現代の電脳空間の中でのシャーマニズム的なものの蘇りが、真性シャーマニズムの復活なのかという疑問と同様、それが本当に祝祭的なものになっているのかどうかということは、もういちど問われるべきではないかと思うのですよ。

斎藤綾子さんがこういうことを述べています。セックスは、コミュニーケーションの一つの方法であるとよく言われているけれども、彼女の場合は違うと言う。彼女は、自分の中にある幻想を膨らませいく、ただそのための通路としてセックスがあるという言い方をしています。私は非常によくわかるなあ、という思いと同時に、違うなあという思いがある。

僕はやっぱり違うんだな。私はセックスというのは徹底的にコミニュケーションだと思っているので、自分の幻想を限りなく膨らませて追求していくというのは分からないではないんだけれども、コミュニーケーションというのはその幻想をも突破したり解体したり再構築したりして、先へ進んでいくものではないかと思うわけですよ。

他界との関係にしても、つながりや連続性の問題にしても、それを一つの言葉で語るとすれば、それはやはり、コミュニーケーションとは何か、どのようなコミュニーケーションが我々に可能なのかということに尽きると思うんです。コミュニーケーションするためには、個体性がやっぱり必要なわけですよ。主体というか、個的な自己というか、要するに発信と受信を同時にするような個体性が必要になる。その個体性の基盤というのは、人間においては肉体です。肉体というのは、感覚センサーの有限性をもっています。我々は宇宙線を感覚としては感じられないけれども、実際に宇宙線そのものは人体内を通過してたりするわけです。意識レベル、細胞レベル、分子レベルそれぞれにおいて、コミュニーケーションのシステムは、多様かつ複雑に働いている。今、宗教に問われていることは、このコミニュケーションの密度をどこまで

人間が深化させていくことができるのか、徹底させかつ緻密にしていくことができるのかということだと思います。そのコミュニーケーションを緻密にさせていく力は、一つはまちがいなく知性です。

そういう意味でも、近代的知性は、非常に重要なエポックだったと思うんですね。つまり、古代的・中世的な宗教的知性、神話的知性だけで終わってしまったら、知性が自分自身から抜け出ていって、自分自身を振り返ってくるような反省的な知性の発達はなかなか生まれない。知性は、自分の知性のありかたを自己否定するような力によって発達していきますから。そういう知性がどんどん深まったり、繊細になったり、開かれていくというフェイズを、我々人間存在はもっているのではないか。それにくわえて、人間の肉体を人間の知性がどうとらえて、どのようなものに加工していくことができるのかということも、同時に問われてきていると思うんです。

こういう近代的な知性の果てに、もう一度肉体そのものを通じたコミュニーケーションの深いありかた、あるいは多様なあり方というものを、人間は冒険していくんだろうという気がします。その一つは、異種間コミュニーケーションですね。

―― 異種間というのは、人間と他の生物種のあいだということですか。

はい。今、非常に具体的な実践として注目されているものの一つが、ジャック・マイヨールたちが行ってきた素潜りの事例ですね。水深100メートルを、素潜りでもぐる。その時に、普通の状態では考えられないような状態がおこる。その一つは、ブラッドシフトといって、末端の毛細血管にいっている血液が、深海に入っていくときに脳に集中するという現象がおこる。これは、人間では普通おこらないとされていた現象なのです。イルカや魚におこる現象が、人間にもおこるのです。そのジャック・マイヨールの場合は、哺乳類として陸にあがったけれども、もういちど海に帰っていった、動物最大の脳の容量をもつイルカと交信することを通して、世界に対するもっと広がりのある感覚を獲得し、自分のもっていると思っていた肉体的限界をもういちど開いていくという試みを行なった。

―― 異種間コミュニーケーションで連想するのは、シャーマニズムはそういうものを、技法として取り入れていました。

まさにその通りです。動物の霊と話すとか、動物のアニマルパワーを身にふりつけてヒーリングをするとか。

―― もう一つは、自然界というか、生態系と人間の性的なコミュニーケーションというものも、文学の中では語られてきたと思うのです。異類婚もありますし、海の潮のうねりや森の官能を相手にセックスやマスターベーションをするというテーマもあったと思います。

それは、おっしゃるとおりです。私が、なぜ異種間コミュニーケーションを持ち出してきたかというと、シャーマニズムの中にあった非常に本質的な一面が、異種間コミュニーケーションによってもういちど検証されていると思うからです。特に、日本の神話の中には、古くは岩や木や草が言問う世界があったと表現されている。そこへ天孫降臨してきた者が、その草木言語り世界のカオスやノイズを治めて、統一的な国家と言語体系に整序していったという事態がおきる。その統一される以前の世界では、草や木や岩が語り、それとツチグモだとかクズだとかいう非常に自然界的な名称で語られている部族がコミュニーケーションをしていたと、日本の神話では語られている。その草木言語の世界のコミュニケーションのあり方をもう一度考え直し、身につける方法論を学ぶべきではないか。

このことは、梅原猛さんの言う縄文時代にまで繋がる部分はもちろんあるわけですけれども、私はそれをロマンティックに取り上げるつもりは全くありません。ただ、異種間コミニュケーションは、日本においても、世界各地においても、シャーマニズムの中でもっとも重要なテーマとされてきたということを確認したい。そして、熊だとか蛇だとか猪だとか鷲だとか鷹だとか、アボリジニで言えばカンガルーであったり虹蛇であったり、そういうものと自分たちの、ある特別で強烈な神秘的絆をもういっぺんもつことによって、それらが守護霊、守護神のようなものにもなれば、自分のなかにある自然治癒力を促進したり媒介していく力にもなる。実際に、そういう動物的なパワーと自分自身が結び付いたという自覚のもとに、ヒーリングを行うことは、呪医治療においては実際になされ続けてきたことですね。

異類婚について言えば、日本の初めの異類婚というのは、三輪山の神様が丹塗り矢に化けて、美人が糞をまるときにそのホト（女陰）をついて、「ホトタタライススキヒメ」が生まれ、やがて神武天皇と結婚して、初代の皇后になったという話がそうです。三輪山の神・大物主神は、神ですけど、実際のその正体は蛇でもあるわけですから。蛇である神は、丹塗り矢にも化けるわけですね。猿とか、熊とだとか、いろんな動物と人間が結婚することを通して、英雄的な力をもった子供が生まれてくるという神話や物語や伝説は、非常に多く、日本のみならず世界中に広がっています。それは異類的な力をふりつけることによって、自分たちの日常的な有限性を越えた力に到達するというビジョンであり、その力の行使だと思うんですね。

―― 最初の話題にまた戻りますけれども、広い意味でのセックスというのが本当は永遠への扉になっていくはずだというお話がありました。だとすれば、異種間の性的なコミニュケーションと、「永遠」というものつながりについてはどう思われますか。

異種間のみならず、コミュニケーションを通して「永遠」につながろうとするときにエロティシズムの問題が出てきます。ノンバーバル（非言語的）コミュニケーションの全般にエロス的な力が関与しています。

ここで、敬愛するＫさんの例を出しましょう。Ｋさんが、大学院生のころ、初めてブナ林に入ったときに、ものすごいブナ林の官能的な力につき動かされて、思わず自分の一物を出してマスターベーションをした。そういう話を彼の口から聞いたときに、僕は、ああ、わかる！

そうだよね！　と思ったのですよ。それをある雑誌に是非載せてくれと言ったんですけれども、彼はその部分を残念ながら自分でカットしてしまった。

私はその時、彼の話に引き続いて、僕は聖地をまわると何か知らないけれどもよく夢精をしてしまうという話をしたんです。場の力に賦活されるというか、非常に刺激されて精を漏らしてしまう。これは、最初、自分の修行が足りないからだと思っていたけれども、しかし単にそれだけではないと思うようになったということを話したわけです。しかし、エロスと異種間コミュニケーションという点では、私は、Kさんのほうが、もっと端的だと思うんですよ。私は、もう15年来、マスターベーションをすることをやめてしまいましたから（笑）。もう、そういうことはできない身になってしまったし、する気も起こらないわけですけど。でも、彼の気持ちと行為はよくわかるんですね。

私は津軽の岩木山で初めてブナ林に入りました。ブナ林に入った時に、ブナの木が放ってくるフェロモンというか、それは非常にエロティックなんですよ。何か妖精的で女性的な、形容しがたい官能的な力の場があって、本当に極めてエロティックだった。この世にこんなにエロティックなものがあるのかと嬉しくも愕然としました。植物に対してそれはありますし、僕は鉱物に対しても、すごくエロティックなものを感じることがあるんですね。それは自然界のいろんな形態、洞窟の中にもあるし、海の波のうねりの中にもある。台風なんてのは、私はとてもエロティックに感じます。森岡さんは高知の生まれでしょう。僕は徳島の生まれだから、台風はエロティックなんですよ。

―― わかるような気がしますね。

ある意味では、地震や、火山の噴火も、すごくエロティックなものなんですね。そういう自然の猛威とか、荒ぶる自然と言われているようなものに対したときに、自分自身の中にある強烈なエロティシズムが刺激されて、その中に入り込んでいきたい、海の嵐の中だったら海の嵐に突入していきたいと思ったりする。もちろん、そこでは人間は木っ端微塵になって、死んでしまうわけですけどね。自分の身が分裂して散り散りになったとしても、死をかけてでもそういうものの中に入り込んでいきたい、という欲求や、衝動に促されてしまう。Kさんのブナ林の場合だと、マスターベーションすることによってブナ林と交感するということですから、自分の理性によってとどめられる範囲なので、もうちょっと距離があります。でも、台風や火山の爆発などを眼前にしたとき、そこから逃げたいという気持ちと同時に、そこに没入して、その力そのものの場に入り込んでしまいたいというアンビヴァレントな気持ちが一瞬にして起こる。これは、永遠に対する強いあこがれや渇望ではないかと思いますね。

―― だとすると、鎌田さんは、そういうエロス的なものを通して、我々が永遠に触れたり永遠の中に入り込んだりするような通路をもっと開くような文明というか、社会というか、生活世界が必要だと考えられているわけですね。

はい。基本的に、エロティシズムをもっともっと繊細に、そして強烈にしていく必要があると思います。人間のもっているコミニュケーション能力の一つは知性、もう一つはエロティシズムです。エロティシズムっていうのは、もちろん想像力と不可分なものですね。だから、エロティシズムを深めて広げていくことによって、異種間コミニュケーションをもっと身体的な、もっと肉感的なレベルで探知していくことが可能になると思うんです。

それをもっと分析的にも総合的にも、広くとらえていくのがやはり知性です。だから、ニーチェが言った「肉体は一つの大きな理性である」(『ツァラツストラはかく語りき』) ということばには、すごく賛成します。そういう、肉体がもつ大きい理性をもっと開発するということ。それは一つはエロティシズムということであり、もう一つはニーチェが否定しようとした神の感覚や霊魂の感覚ということです。それは、シャーマニズムにまで当然つながっていきます。

―― 補足的にお聞きしたいんですけど、例えば、アメリカのカウンターカルチャー運動がその後どうなったかと言うと、そのひとつの方向は、セックス・ドラッグ・ロックンロールというような感覚的な狭められた世界に向かっていく。鎌田さんの目から見ると、矮小化されたエロスというか、感覚的、刹那的快楽の連続を求めていく。これが、今日のアメリカの病理へとつながっているわけです。鎌田さんのおっしゃるのは、それとは違うわけですよね。

それは一つの試行錯誤でもあったのでしょうしね。我々の世代もそういう時期を通過した人がいっぱいいますし、僕の友達にも、ドラッグで捕まった人達がたくさんいて、それを、僕自身、そうした経緯や経験は無意味なものとは全然思いません。

ただ、ここではその発端を考えてみたい。そのドラッグなら、ドラッグがどこからおこってきているのか。それは、もちろん古代の宗教儀式においてドラッグが使われたり、インディアンの瞑想を助けるため、あるいは儀式を助けるために、ペヨーテという、メスカリンが幻覚症状をおこす薬物を使っていた。それは、ひとつのコスモロジーや神話を共有する人たちが、ドラッグを通じてその宇宙的深遠や神話的世界に触れていくわけで、そういう永遠的な神話的世界のリアリティを感得していく構造があったわけですよ。しかし、ロックンロールはそういう意味での神話性をまだ見いだしていなかったし、今なおそういう意味での共通の神話というのはない。それがロックンロールの現代的個体性である以上、それは身体的に暴走していく一面があると思うんです。

しかし、その近代における発端を考えていく時に重要なのは、イギリスロマン派の詩人ウィリアム・ブレイクです。ウィリアム・ブレイクは、「知覚の門 the door of perception」を清めたならば、事物がそのものとして、ありのままに無限に開かれて、自分たちの前に現れて出てくるだろうと言います。つまり、人間は感覚のセンサーのある限定された領域の中、いわば感覚の牢獄にいるわけだけど、もしそのセンサーの扉をもっと開いていくことができたならば、もっと深く繊細に事物の世界とコミュニーケーションを深めていくことができるということです。それを、彼は「アルビオンの誕生」という、裸体の青年がオーラに輝いている絵で表しています。大江健三郎は『新しい人よめざめよ』という小説を書きました。「新しいひとよ目覚

めよ O rouse up young men of the new age」というのは、直訳すると、新しい世代の若者たちよめざめよという言葉で、「ミルトン」と題したブレイクの詩の中にあるのです。ニューエイジよ目覚めよというのは、今言ったような、知覚の門を開けというテーゼでもあるわけですね。

ウィリアム・ブレイクは、詩人でもあり画家でもあるんですけれども、ドルイドだった。彼は、キリスト教徒ですが、異教的なケルト文化における詩人であり予言者であり天文学者であった古代の賢者のドルイド的知を現代に蘇らせようとして、イギリスにおけるドルイド結社のチーフを死ぬまで20数年間努めた人なんです。

ドルイドというのは、ケルトの宗教では樫の木の賢者という意味です。ドルイド的な知性というのはシャーマニズムも含んでいたし、輪廻転生や霊魂不滅の思想を含んでいました。20世紀になって、オルダス・ハックスレーという人が、『知覚の扉』という本のなかで、メスカリンを使って自分の知覚の扉を拡大して開いていくということをやる。それは、アンリ・ミショーやランボーなどの詩人達が、神秘主義的思想とドラッグの併用によって、新しい感覚世界、感覚の地平を開いていこうとした、そういう知と身体の冒険の延長線上にあったわけです。

ハックスレーは、『永遠の哲学』という本も書いています。知覚の扉を開いてゆけば、いままでの知覚コードではとらえられなかった次元の違うコミニュケーションのレベルに達しうるし、それは永遠性に触れていくことにもつながっているという直観が、ブレイクにもハックスレーにもプラトンのエロス論やイデア論にもあった。そのテーゼは何千年来、何万年来変わっていない。形を変えて、繰り返されていると思うのです。その流れが、ウィリアム・ブレイクからオルダス・ハックスレーを経由して、ニューエイジにまでつながってきている。そのときハックスレーを経由したために、ドラッグが知覚の変容を促していくひとつの方法論になってきたということなのです。

―― 宗教の問題に、もういちど戻りたいと思うのですが。

生命と宗教を語るときに、最も本質的な問題として私が取り上げたかったのは、「永遠」あるいは「永遠性」という問題です。永遠性につながることによって生命が救済されていく、何か他のものに自分自身が連続的につながっていくことによって救済されていくというストーリーがあると思うんですね。その点においては、一神教であろうが多神教であろうが、基本的には同じ構造をもっていると私は思うのです。

もちろん一神教と多神教は全然違うという視点も可能です。しかし、神の永遠性に触れることによって、個体的分断が大いなる連続性のフェイズに連れ出されて救済されていく。それは、輪廻転生であろうが、永劫回帰的な循環であろうが、キリスト教的な一回限りの天国での救済であろうが、永遠性に触れるというテーゼ、永遠性に触れることによってもういっぺん蘇る、永遠の生命の中に入っていくという構図というのは、かなり大きい物語だと思うんです。

輪廻転生は、インド的な物語の中では、非常にネガティブにとらえられています。輪廻転生は苦しみであり、業の連鎖の中にあるがゆえに、その業から抜け出て解脱し、解放されていく

ということを求める。

ところが、日本に入ってくると、例えば楠正成が語る「七生報国」のように何度でも生まれ変わっても国のために奉公するとか、生まれ変わって生まれ変わってして、子孫のためにも、社会のためにも、国のためにも役立とうとするような、循環してこの世に降り立ってくることを、非常に肯定的にとらえる思想があります。

このふたつを比べると、インド的な感性の方がむしろ特殊で、生まれ変わってくることをネガティブにとらえるような発想は、古くはなかったと思うんですよ。ただし、ネガティブであろうが、ポジティブであろうが、生まれ変わってくるという回路を通して永遠性に触れる。永遠性によって救済の道がひらけるということは、いずれにせよ一貫しています。

ところが仏教はそれとは違う。というのは、仏教は、永遠に触れることによって人間が救済されるという物語とは違うところに到達した、到達しようとしたからです。それは、簡単に言うと、〈永遠と刹那〉の合間に立つ、あるいは〈自然と霊魂〉〈自然と神〉の隙間に立つという位置です。どちらに対してもあるディスタンスをとる。どちらも宙づりにするようなディスタンスをとるんです。仏教は、それを、「無」という言葉で語ったり、「空」という言葉で語ったりします。それはなぜかというと、永遠に触れることよって人間が救済されるというのも、一つの迷いであり執着であり、それ自体がもう一つの苦を生み出すからなのです。永遠によって、果たして救済されるのか、と問う。そういう人類が業として担っている執着の構造を、全部、一回とらわれのない状況に置いてみる。救済という物語ではなくて、救済そのものがどういう成り立ちをもっているかということに気づくこと、それを洞察することを通して、執着と救済の物語とは違う位置に立とうとしたのが仏教の非常に重要な人類史的位置だと思うんですよ。

だから、永遠性に触れるということをあえて求めない。しかし、大乗仏教やその後の仏教史、密教なども含めると、「大日如来」や「久遠の本仏」に触れるわけだから、永遠の哲学に戻っているわけですよ。だから、宗教史の中で、永遠の哲学や、永遠のビジョンがいかに強烈に人類の心を貫いてきたかということが、そこから逆に読み取れると思うんですね。

しかし、ブッダの位置は、その永遠の哲学に対する断念と、そこから一回離れるという位置を獲得したのではないか。だからこそ、彼は呪術を禁止し、神話的な体系によらなかった。つまり、シャーマニズム的世界を、一回自分たちの生きる空間から切り離そうとしたのです。

永遠の哲学につながっていく方向性と衝動と構造は、シャーマニズムにもアミニズムにある。しかし仏教の原点においては、あえて永遠に対するはっきりした位置をもとうとした。永遠に対する執着の構造から離れようとした。それは、非常に貴重な位置だったと思います。

―― お聞きしたいことが2点あります。ひとつは、永遠なものから距離をとろうとすると、ふつうは「刹那主義」になっちゃうわけですよね。刹那主義というのは、まさに今ここにある刹那の瞬間を、その都度その都度生ききる、という考え方です。けれども、今、鎌田さんがおっしゃったのは、それとは違うんですよね。では、どこが違うのかというのが最初の質問です。第2点は、鎌田さんはそういうブッダの考え方を、再評価しようという立場なのかどうかということです。

第１の質問については、永遠につながろうとすることも、刹那的な今ここに生きようとすることも、どちらもある強い執着を生むという認識がまず根底にあるということだと思うんです。永遠にもいかないし、刹那にもいかないという、ある距離をとろうとするわけです。つまり、執着や業に人間が搦め捕られている構造を解きほぐしていく行為そのものが、そのような距離をとらせる。それが、「空」とか「無」とかの、仏教的な悟りの言葉で語られている位相じゃないかと私は思うわけです。

救済されるという物語も、一つのとらわれなのだという認識があると思うんですよ。救済されるという物語がとらわれであることによって何が起こるかといえば、一つは宗教戦争がおこるわけです。それは、どちらがより正しい教えなのか、どちらが本当の救済なのかという問題を生み出していきますから。救済と救済が、戦うわけですね。こっちのほうが本当の救済だよ、そんなので救われるわけないじゃないか。お前の神様はまちがった救済を説いてる、ということになりますよね。だから、救済をめぐって、宗教同士が、まさに相手を撲滅したり、抑圧していくような構造をもってしまう。それは永遠につながろうとしながら、その永遠性をもっとも暴力的な形でこの地上に実現してしまう行為になりますから、結局、永遠の宗教的暴力化ということになるんですね。

それから、刹那に生きるという刹那主義も、人間のもつ個的欲望、肉体的な欲望や、名誉欲だとか金銭欲だとかいろんなものがありますが、それらによって、一人一人がより不自由になり、よりとらわれの中に入ってしまうということがある。

ですから、どちらの極にたいするとらわれからも自由であろうとするようなほぐしかたが必要です。それが、ブッダの位置ではなかったかと私は認識しています。

第２の質問に対する答えも、永遠の哲学や刹那の哲学に対する、ブッダ的な中道の哲学は、今日においても非常に重要な意味ををもつはずだと私は再評価しているわけです。私は、シャーマニズムの再発見・再発掘・再評価をしようとしてきたわけですけれども、あるとき、シャーマニズムがもっているディオニソス的な力、その闇や権力性や暴力性に強く気付いたことがあるんです。その時、シャーマニズム的な暴力、アニミズム的な暴力からもっと自由になるための道、それから解放されていく道も同時にとても必要だと思ったのです。その時に、原始仏教のブッダの教えは、シャーマニズム的な暴力性をほぐしていく力と方法と方向性をもっていると認識したのです。癒しについても、永遠につながることで癒される癒され方もあるし、永遠からも刹那からも脱却することによってもっと癒されるという癒され方もある。つまり救済的癒しと解放的癒しですね。

―― シャーマニズムやアニミズムが秘めている暴力性とは、どんなものなのですか。

シャーマニズムもアニミズムも、ある力をもちますね。例えば、パワーアニマルを自分が得たとします。そのパワーアニマルというのは、力自体です。力は善でもなく悪でもなく、力そのものです。それが相手との関係性によって、相手を支配しようとしたり、奴隷にしようとするような力に変化する。その力の典型的な神話的かつ制度的構造が、王権です。宗教団体の教

祖も、そういう力を背景として出てくる。

そういう力は、かならずしも人間を本当に解放していくわけではなくて、逆に人間を呪縛し抑圧するような権力的な力と構図に、しばしば転化する。例えば、魔術においていえば、黒魔術と白魔術という二つの魔術のありかたがあります。黒魔術とは、簡単に言うと、魔術的力の行使によって自己のエゴイスティックな個的欲望を実現しようとする。それに対して白魔術は、他者の幸福のような利他的な救済を達成するために魔術的力を行使する。魔術的な力そのものは変わらないとしても、それがどういうふうに使われるか、どういう人間関係のなかで使われるかによって、魔術的な力の行使の仕方は変わっていきます。剣でいえば、殺人剣と活人剣の違いですね。シャーマニズムには、力そのものの体験や現前があるわけで、それを通してどういう人間関係や社会関係を構築していくかが常に問われてくるわけです。ですから、その使われ方によっては、個人の生命を支配して、自分に都合のいいように改造するということにもなります。それから他の宗教との間での宗教戦争や、あるいはシャーマニズムを母体にして生まれてくる救済の物語相互の戦いといったものを生み出す。そういうサイキック・ウオーズ（心霊戦争）やマジカル・ウオーズ（呪術戦争）を生み出すシャーマニズム的暴力性というものが、私はあるんだと思います。

―― だとすると、シャーマニズム的なものの再評価と、ブッダ的な中道の再評価との関係は、どうなっているのでしょうか。

両方共存しているという事態ですね。揺れ動いているということかも知れません。例えば、セックスの問題ひとつをとってみても、さっき言った白魔術と黒魔術と同じように、圧倒的な力の現前というものをやはり体験する。その力の現前を通して、自己刷新や自己解放を遂げたり、癒される場面も、しばしばあると思うんです。宇宙的な感情、というか宇宙的なものをその中で感得することはしばしばある。それは、エネルギーの循環みたいな構造でもありますから。セックスを通して永遠につながり、癒しがおこるという局面。これは否定できないものとしてある。体験的にも、周りの人の話をいろいろと聞いたりしても、間違いなくそういうものはある。つまり、性による解放というのか、それによってある感覚の地平がバーンと開かれていくというような場面がある。

しかし、そのように開かれる体験をもったとしても、それがまた別の場面においては、支配や執着や閉じられた暴力性を常に生みだし得る。そのきわどいせめぎあいを、性は常に抱えている。それゆえに蠱惑的であると同時に、暴力的・支配的で、いのち（生命）とりにもなるのです。

―― なるほど。

シャーマニズムも、この力の両面性を、常に含みもっていて、状況と関係のあり方如何でどちらにも反転し得るきわどいパワー・オブ・バランスの上に立っています。したがって、どち

らの要素をも含み込みながら、どちらの方が今ここにおいて、強くあるのか、また常にそれら両極を意識して、どういうふうな倫理的位置に立とうとするかが問われていると思います。でも、両方に足をかけているという構造そのものは、同じです。

そして、シャーマニズム的なエネルギーの流れが、暴力とか抑圧とかを生み出さないような構造に軌道修正し、自分自身が深く内省できるような状態にもっていくためには、「正見」と「正定」に根ざしたブッダ的な第三の目が、常に必要ではないでしょうか。そういう第三の目としてブッダは、非常に重要であると考えています。

―― とても分かりやすい図式ですね。あえていじわるに言えば、基本的にはシャーマニスティックなエロス的コミュニケーションの充実をめざすのですが、それが暴走し始めたときのブレーキの役割として、ブッダ的なものをも備えておきましょう、という話ですね。

それは、ブッダをあまりにも矮小化し貶めている言い方になりますから、私はそういう言い方はしません。ブッダのような認識が必要だとしても、私はブッダそのものじゃありませんから、私自身の位置からすると、まずエロス的な力を十分に味わいきるということが必要だと思うわけです。

つまり、シャーマニズムにおいても、性においても、あるいは異種間コミニュケーションにおいても、どこまでそれを徹底して開いてゆくことができるのかということが、やはり「永遠の哲学」の一つの課題だと思うんですよ。ある瞬間、暴走しないと見えてこないものっていうのが、常にありますからね。そこには、生命を断滅するくらいの力があって、大嵐にまきこまれて、その中に没入して、そこでいのちを失うということも、あり得るわけですよ。そういうことを望む人は、そういうことがあっても、それはそれでいいんだと思うんです。そういう力を自覚して入っていく限りにおいては、それはその人の主体的選択であるし、そういうものの中に取り込まれることを心の中で望んでいるわけですから、それは構わないんです。

しかし、もう一方で、他者を完全に支配し、抑圧し、断滅しようとする力に転じ得ることもあるのですから、それに対するブレーキっていうか、反省が必要なのですよ。無条件・無前提な生命力の昂進とか、生命力の活性化の道だけじゃなくて、老いてそこから身を退ける叡知というか、そういう第三の目をもっていなければ、他者をも含む大きい協同関係をどう構築していくかというときに、何か決定的な過ちを犯すと思うんです。人類はこのような巻き込み方を常に繰り返してきたし、さらに強固な拡大再生産すらしてしまうと思うんです。核だとかナチスのような異常の拡大再生産を今後もしてしまうだろうと思うがゆえに、ブッダ的な第三の目が必要だと私は言いたいのです。

―― よくわかりました。ひとつのポイントは他者であり、もうひとつはコミニュケーションという地平でしょうね。

コミニュケーションを非常に繊細に知的に深めていくためには、どうしてもブッダのような

位置を、どこかでもたなければいけない。そうでないと、自己と関係性を真に反省的に深めてゆくことは不可能じゃないかと思うわけです。シャーマニズムとか永遠の哲学だけではダメです。

—— たとえば、シャーマニスティックな生命力の暴走がはじまって、それが共同体や国家を巻き込んでしまうことがあります。そういうとき、その暴走を止めるためには、ふつうは司法とか、警察力とか、軍事力とか、あるいは社会運動などの別のパワーをもってきて止めようとするわけですね。しかし、鎌田さんがブッダの目ということでおっしゃりたいのは、そういうことではないわけですよね。パワーの暴走にたいして、別のパワーをかけるということではなくて、もうちょっと違うことなんですよね。

別のパワーであってもいいんです。ベトナム反戦でもね。それは、そういう形で出て来ても、私は全然構わないと思う。つまり、人間の肉体の有限性と関係の有限性に立つ限り、これかあれかという選択をしなければいけないときってありますね。これかあれかという、行為の実存的選択をしなくてはならないときに、いつも自分を第三の位置に宙づりにしておけとは、ちっとも思わないんですよ。その都度その都度、自分がどういう位置にいるかということがまさに問われているので、私はある力に対するアンチの力になるという選択をしたって別に構わないと思いますし、そのようなことは大いに有り得ると思います。

—— アンチの力を立てるということは、ブッダの目からすれば、それ自身が非常に大きな執着であるわけですが、そのことが分かりきったうえで、あえてするということですか。

はい。わかっていてもするということです。

—— そこは、とても微妙で、難しいところですよね。

出家僧のように、文明社会からも自然界からも一歩退いた山里から、いつも傍観者のように社会を眺めていて、「人類はいろいろなバカなことをやってるわい」みたいな森の隠者的な位置に立つことで、ブッダの認識が完成するとはちっとも思わないです。

—— でも、ブッタ自身がインド社会の中で選んだ道は、それですよね。

（沈黙）そうでしょうか。

—— 教科書的に言うと、人里離れたところに共同体を作ったのですよね。ブッダの場合は。

サンガというものをね。

―― それは、ある意味では傍観ですよね。

はい。それは、さっき言ったように、刹那的な快楽の哲学と、バラモン教的な永遠の哲学の二つの力が、互いに補完しながらカースト社会のような抑圧と苦とを生み出していたのですが、そこから自覚的に自由であろうとするような位置だったのです。そのためには、それへの気づきと、そういうところから身を離すような生き方が必要だったと思うわけですよ。それは傍観という無変革ではなくて、達観という静かでソフトな世界変革だったのです。

しかし今日のような、地球的な規模を覆いつくしていく力をもった文明社会の中で、そのような森の隠者的な生き方することが、果たしてブッダ的かどうかすごく疑問です。今から2500年前の、あのインド社会の構造の中で成立したのと同じようなものが、今ここにあるかというと、文明の在り方も、知性の在り方も変わって来ているんじゃないかと思うんです。だから、ブッダ的なサンガを今ここに実現することが、ブッダ的な認識の生かし方だとは、私はあまり思わないです。

―― では、ここで、究極の質問をします。今日のような現代文明の中で、森の隠者的な共同体に戻れっていう思想の有効性は、たぶんないんだと思いますね。ところが、梅原猛さんなどの文化人が言っているような、現代の欲望にまみれた文明をもうちょっと昔に引き戻して、もう少し欲望や執着の少ないような、昔の時代の良き自然や人間関係を取り戻さなきゃいけないという言説が結構あるわけですよね。それらを念頭に置いたときに、鎌田さん自身は、現代文明の中で我々はどういうスタンスを取るべきだと思いますか。

簡単に言うと、一つは覚悟の問題だと思います。私は、「自然に帰れ」のようなルソー的な言説も、「森が人類を救済する」というような梅原さんの森の文明論でも、救済はやっぱりできないというふうに思います。自然に帰ることによっても、森に帰ることによっても救済ができない。その理由のひとつは、生命とか自然というものをひとつながりのものとして考えるならば、それは絶対的な性善説でも性悪説でもとらえられないということです。この点では、『生命観を問いなおす』（ちくま新書）の森岡さんと共通する認識が私にはあると思います。自然に帰れとか、森に帰れって言う人は、自然や森というものが、一種の性善説として割とロマンティックにとらえられていると思うんです。でも、私が思う自然というのは、ものすごい暴力性を含むものなんですよ。あるいは自然そのものがもつ欲動というのか、そういう力、常に自らを突破してしまうような、常に自己解体を含むような暴力性のようなものをも同時に含んでいる。常に何か恩恵を与え続けていくような、優しい自然だけではもちろんないわけですよね。食うや食われるの関係もありますし、火山の爆発や台風によって森林がなぎ倒され、地震によって壊され、また氷河も気候変動によって溶けて沈没してしまうとか、あるいは隆起するとか、そういう荒々しい、荒ぶる力そのものなんですね。私は、そういう力を認めなくてはいけないと思う。そして、同時に、生命そのものにもそういう側面があるし、人間の生命というのは、それをもっと拡大したものだと思うんですよ。

人間が、それを拡大しているというのは、人間は道具をもち得るがゆえに、拡大できると思うんです。人間がこの身体性のみにおいて生きようとしたならば、いくら荒ぶろうとしてもたかが知れています。

しかし、人間は旧約聖書にもあるように、神の戒めを破って、禁止されていたエデンの園にある善悪を知る木の実を、蛇のそそのかしによって食べちゃう。聖書的な言い方をすると、食べたことによって、永遠の世界から放擲されるわけです。エデンの園には、中央に神に食べてはいけないと禁止されていた木が二本あった。善悪を知る木と、生命の木の二本です。そこで神は恐れたわけですよ。もし人間が生命の木を食べると、永遠の生命を得ますから、完全に神になるわけです。知恵と永遠の生命というのが、神の二つの力、属性、位相として考えられているわけです。蛇はそれ食べろとそそのかすわけですけど、人類は永遠の生命の木は食べなかった。ただ、善悪を知る木の方は食べた。そのために、神によって追放された。つまり、人間は永遠からは追放されたけども、善悪を知る者になり、永遠を渇望する者にも同時になった。

そのときに、イチジクで局部を覆いますよね。つまり、それが人類のパンツの起源を神話的に物語っているのです。旧約聖書によれば、道具の始まりというのは、武器ではなくてパンツである。そしてパンツをはくことによってエロティシズムが生まれた。想像力も。

―― （笑）なるほど。

栗本慎一郎さんの『パンツをはいたサル』（光文社）、僕はあれは名言だと思う。言い得て妙だと。つまり、パンツをはいてしまったがゆえに、性というものからも、自然からも、永遠からも、パンツ一枚で隔てられている。そのパンツ一枚によって隔てられた人間は、人間的欲望と想像力によって、その心のなかにあるものを拡大し続けていくことができる、それを外界に現わし続けていくことができる、つまり、道具を発明したわけです。

道具の発明、――武器、機械、電脳、コンピュータの発明ももちろん含みます。そういう道具的な力によって、人間は、自分の心や欲望や想像力を、自己外化し続けてきたわけですから、たんに自然に帰れということだけでは全然解決しないと思う。そういう人間存在の在り方そのものを、引き受けていくしかない。そうしたときに、では、そのパンツをはいたサルが次にどのようなパンツをはくのか、あるいはパンツを脱いでしまうのか、パンツを脱いでも、さらに別のパンツがあると思うけど、何か違うものにはきかえるのか、あるいははかないことを通して何か別のものになっていくのか、といった道を探るしかないんではないかと私は思うんですね。

―― それは知性の問題でもあると思いますね。

だから知性というものを、どこまで発達させることができるのかということですよ。渇望はあっても、永遠性に至ることはできない。人間の身体をどのように機械化しても、永遠からはもう外れてしまっていると思うんですね。だから、究極的には、知性の問題になってくると思

います。しかもそれは、愛とか慈悲とか友愛とか勇気とかの感情的な要素を含んだ知性ですね。それこそエロス的知性です。

―― では、いまの現代文明を形作っている知性は、どんな知性だと思いますか。そして、将来、現代文明を克服できるかもしれない知性とは、どのような知性だと思いますか。

今ある知性は、デカルトに倣って言えば、「延長的知性」です。それは延長というものを通して、生命の連続性も、人間の関係も、エコロジーも、とらえてきた知性です。

つまり、ある普遍原理があって、それが延長的に、均等的に、あらゆるものに当てはまると考える。ヒエラルキーはもちろん認めない。不均等な構造というものもない。そういう延長的な知性は民主主義とも通じるし、近代的人間像である「基本的人権」とも当然結び付く。そういう延長的知性が、我々の文明や知性や社会構造を、大きく支えているものだと思うんです。

でも、「本当に知性というものは延長的なんだろうか」という問いかけが、シャーマニズムや宗教にかかわったとき以来、私のなかにある。エロティシズムやインスピレーションは、非常に非延長的なもので、不連続な部分、飛躍や直観を含んでいます。エロティシズムとは、どんなに遠く離れていても、それを身近に感じることができる能力でしょ。恋人が物理的に月にいても、自分の魂のそばに寄り添っているというこの感覚は、延長的知性とはまた違う知性だと思うんですよ。これは、一面では宗教的知性であると同時に、エロティシズムの知性です。

エロティシズム的知性というのか、生命が含む暴力みたいなものも同時に見ていける知性が、必要になってくると思うのです。たとえば、異種間コミュニュケーションを成立させるひとつの鍵は、エロティシズムだと思います。しかし、エロティシズムは、そのような異種間コミニュケーションを拡大していくと同時に、それらを飲み込んで食い尽くしてしまうような暴力性、他者を侵犯していく力を同時に含みもっている。

ですから、それに対する繊細さというか、仏教的な言い方をすると、慈悲とか利他ということになるんでしょうけど、徹底的にエロス的であり個体的でありながら、同時にそういう欲望から超越できていく知性が必要になる。

―― こうふうに解釈したら、間違っていますか。まず、現代文明――近代からずっと続いていると思うんですが――は、延長的知性に足場を置いてきたわけですよね。しかしそれは、さまざまな問題を産出してきた。

そのときにひとつ考えられるスタンスとしては、延長的知性に足場を置きながらも、それが生み出して来たさまざまな抑圧とか問題を、エロス的知性によって補完していくような立場が考えられますよね。それは、いわば延長的知性修正主義と言えるでしょう。

しかし、鎌田さんがおっしゃっているのは、それとはまた少し違っていて、むしろエロス的知性の方に足場をおくんだけれども、エロス的知性にだけ足場を置いてやってると、それはある種の暴力性だとか、他者の飲み込みだとかいう別の抑圧を生み出していく。だから、そういうふうに暴走しないために、ブッダ的な目というか、そういう装置を用意しておく。これが鎌田さんの

立場に一番近いというふうに解釈したら、間違っていますか。

それでいいと思います。私は延長的知性に足場を置くつもりはありません。満足しきれませんから。なぜかというと、人間のもつ肉体的な部分こそ、霊的なものと深く結び付いていると思っているからです。だからこそ、「聖地」は「性地」であるとか、性感は霊感に比例するとか、そんなふうな言い方をするわけです。エロス的な力というのは、関係のありかたそのものに働いている、身体的かつ霊的な、全体的な力の場だと思うのです。だから、そのエロス的なものをどのように作用させるかによって、コミュニュケーションの密度は大きく変わります。

一番わかりやすいのは恋愛なんですけど、遠くにいるものを本当に身近に感じる。この世にいない者すら、自分はいつも同伴しているという感覚。これは、エロス的な力の本質だと思うんですよ。この世ならざるものへの、他界的想像力といっていいようなもの、そういうものが、ニーチェが言う「肉体は大きい理性である」という肉体理性へとつながる基盤だと思うのです。

そこに足場を置いたうえで、もちろん、物質世界は延長的に成り立っていますから、それを正しく厳密に見てゆく側面も必要でしょう。エロス的なものを徹底的に味わう方向と、エロス的な力を明晰にさせる力としての延長的な知性が両方必要です。そして、その全体的な場をブッダ的な知性、第三の知性が支えている。

―― 非常にクリアーだと思います。今の三つの要素が出てきましたよね。「エロス的知性」と「延長的知性」と「ブッダの第三の知性」。その中で、一番の足場はどこかというと、エロス的知性だと考えていいわけですか。

そうです。イドです。

―― その立場は魅力的だし、わたしもそれには共感したい面がありますね。確認ですけど、延長的知性が問題を生み出したからエロス的知性に戻れば良いという、これも「森に帰れ」と同じパターンですが、それとは違うんですよね。微妙だけれども。

延長的知性がエロス的知性を明晰にしていくということを、知性の力として認めなければならないと思うんです。エロス的な力は、明晰さよりもむしろ直覚性や全体性の中にいつも置かれているわけで、すごく曖昧になり易いし、ずらしていくことも可能なんですね。メタフォリカルであって、自分は鳥であり、熊でありイルカであるというふうに、全部うつしかえていくことができるような知性ですからね。そうじゃなくて、「わたしはわたしなんだ」「わたしはわたしでしかありえない」ということをどこまでも掘り下げていく即物的徹底性が、延長的知性の中にあると思うのです。そういうリアルな自己遡及力や徹底性は大事です。

―― 非常によくわかりました。これは多分、わたしの上田紀行に対する批判と重なってくるような気がします。

大いなるいのちやそのつながりの中に解き放たれることによって、解放されるということは、私はそんなに信じられないわけですよ。もっと、個体的なものを明晰にしていくこと。それとエロス的な力の開発と、両方いるのだと思うんですね。でも、それは正なるものと反なるものという構造じゃなくて、それをもうひとつ統括してそれ自体を生きさせるフィールドがあるんだということです。そういう、知恵の場と力を作って来た宗教的伝統や宗教的人物は、やっぱりいると思いますね。

――「生命と現代文明」を宗教から見るというお話、とても内容が濃かったと思います。共同研究の締めくくりにふさわしいものでした。ありがとうございました。

(1995年3月19日・鎌田東二氏自宅にて)

補記(1):この対話は1995年3月19日に埼玉県大宮市の拙宅で行なわれた。その翌日、3月20日に地下鉄サリン事件があり、3月22日以降、同事件殺人予備罪や監禁容疑でオウム真理教教団施設の捜索や教団幹部の逮捕が相次いでいる。事件の全容は未だ不明であるが、宗教的権力と暴力について人は敏感にならざるをえないであろう。「宗教・永遠・エロス」と題したこの対話がその問題に言及し、かなり突っ込んだ問題提起を行なっていたことは単なる偶然であるが、これを手がかりにさらに考察を進めたい。私自身は宗教が自らの宗教性を批判的に超出し、さらなる深化をとげていく可能性のあることを確信している。私はそうした宗教の自己刷新力を「超宗教」的創造性と呼んでいる。

(4月25日・鎌田東二記)

補記(2):校正のために読みかえしていて、鎌田さんとの対話の内容が、あまりにもオウム真理教事件の突きつけた問題群とオーバーラップしていることに驚く。補記(1)にもあるように、この対談は地下鉄サリン事件の前日に、大宮市でなされている。これは単なる偶然だとは思うが、その背後にある時代の大きなうねりの中に、我々もまた巻き込まれていたことだけは確かだと思う。この対話のあとに、これをさらに発展させた、鎌田東二『宗教と霊性』(角川選書、1995)、森岡正博『宗教なき時代を生きるために』(法藏館、1996)がそれぞれ出版されたことを付け加えておきたい。

(12月30日・森岡正博記)